

到着於「トビーンズ」

川口救出訴え署名活動

朝鮮による拉致被害者の
を政府に訴える署名活動
日、川口市本連の新郷工
地の夏祭り「はんはん祭
場で行われた。「拉致問
考える川口の会」の前原
会長や拉致被害者の家族
の会場の一角にテッ
出して、速やかな被害者
を訴えた。



978年に拉致された川
出身の田口八重子さん
聖時(22)の兄本間勝さ

年だった藤田進さん(同19)
の弟隆司さん(61)川口市
は「元が拉致されたことが
なかったことにされるのでは
ないか」という不安を感じてい
る。声を出さない拉致被害者
本人のために、せめて家族の
私たちが声を上げ続けなけれ
ばならない」と決意を新たに
していた。(岸鉄夫)

浦和区でSDGs学ぶ展示会

児童ら学習成果発表

市民団体「世界に目を向け
よう」今、私たちにできる「
とく」が18日、さいたま市浦
和区のコムナールで、夏のイ
ベントとして展示会を開催
し、世界で広まっているSD
Gs(エスディージーズ)持
続可能な開発)など学習した
ことについて、小学生らが成
果を発表した。

同団体は元中学校英語教諭
の金子玲子代表が中心とな
り、県内に住む小学生から大
学生までが月に2回集まり、
SDGsなどについて勉強会



自分たちで考えたSDGsをま
くて遊んで子どもたち18日午後
さいたま市浦和区

を行っていた。夏のイベン
は各自が学んだことについて
クイズなどを交えて来場者に
紹介する発表の場でもある。
来場者にSDGsの理念や
捨てられたペットの殺処分問
題などについて解説したさい
たま市立大谷口中学3年の新
原功将(13)すけ(さん)は「子
どもの時にはポイ捨てをしな
い」ことの大事さをよく分から
なかつたけど、(団体の)一
員になつてからはSDGsの
達成のために頑張りたいと思
うようになった」と語る。

管内利用状況を発表した。
東北新幹線(大宮-宇都宮間)
と上越新幹線(大宮-高崎間)
の利用者合計は、昨年同期並
みの292万6千人だった。
東北新幹線はほぼ横ばいの
156万9千人。同社は、昨
年、栃木県などが行った観光
客集客企画「栃木グスティネ
ーションキャンペーン(D

お盆の新幹線 前年並み利用

JR東日本大宮支社
説明した。上越新幹線は同比
1%減の135万7千人。お
盆期間中に天候不順の日があ
ったことが少し影響した可能
性がある。前年並みの利用を確保でき
た。帰省利用も堅調だった」と
0人。栃木DCの後継企画の
効果もあり利用が伸びた。日
光方面に向かう訪日外国人の
利用も見受けられたことした。
同支社管内での近距離切符
の販売枚数(ICカード利用
含む)は、1%増の488万
3千枚だった。(小林哲伸)

団体に参加し、活動を通じて
自信がついたみたい」と話し
た。女性の息子は「勉強会で
金子代表と話す心がすつき
りする」と言い、父の母国で
のごみ拾いやSDGsをテー
マにしたすごろくで現地の人
々と交流する」ことを企画して
いるという。

同団体は24、25の両日、プ
ラザイスト(さいたま市緑
区)でも同じイベントを開催
する。(伊藤明日香)

浅間山噴火警戒 レベル引き下げ

山頂から2きは継続
気象庁は19日、浅間山(群
馬、長野県)の噴火警戒レ
ベルを「入山規制」の3から
「火口周辺規制」の2に引き
下げた。8日以降新たな噴火
はなく、火山活動が低調に推
移していると判断した。山頂
から約2.5kmの範囲では引き続
き大きな噴石や火砕流に警戒
するよう呼びかけた。

第1407回ロト6=数字選択 式全国自治宝くじ(19日・ 東京宝くじドリーム館) 【本数字】 10, 13, 19, 28, 33, 39 【ボーナス数字】 15 1等 該当なし	第5245回ナンバー 選択式全国自治宝 くじ・東京宝くじドリ 【ナンバーズ3】 ◇ストレート 102200円 ◇ボックス 34000円 ◇セット・ストレ 68100円 ◇セット・ボック
--	--

「多くの幼い命犠牲に」
対馬丸生存者が体験語る

気象庁によると、19日まで
に新たなマグマの上昇を示す
地殻変動はなく、火山性地震
や火山ガス(二酸化硫黄)の
放出量もやや少ない状態で、
山頂火口から約2.5kmを超えて
影響を及ぼす噴火の可能性が
低くなったと判断した。
また気象庁は19日、浅間山

太平洋戦争後期に学童疎開
暮らす生存者で語部の
清さん(85)が19日、広島
講演した。沈む船から海
び込んだ際の様子も、お
の赤ちゃんを含む多くの
命が犠牲になったことな
証言した。



上原さんは当時10歳。
攻撃を受けた直後に傾き
「私は最初に飛び込んだ

浦和東高B 少年 部 県代表

戦では、浦和東高Bが先制して
1-0で勝利した。この試合で

17 被災者と中学生交流

東日本大震災から8年5カ月となった11日、東京電力福島第1原発事故で故郷を追われ、加須市などで暮らす福島県双葉町民と中学生らが同市で交流した。



埼玉新聞

8/12

双葉町民と中学生ら交流

経験聞いて思い共有 加須

東日本大震災から8年5カ月と須」と題して、同センターと、きなつた11日、東京電力福島第1原いたま市の地球市民学習「世界に発事故で故郷を追われ、加須市など暮らす福島県双葉町民と中学生らとの交流会が同市正能のNPO法人加須ふれあいセンターで開かれた。町民の経験などを聞き、思いを共有した。

東日本大震災から8年5カ月と須」と題して、同センターと、きなつた11日、東京電力福島第1原いたま市の地球市民学習「世界に目を向けよう」今、私たちにできること」(金子玲子代表)が共催。5回目となる今回は双葉町民7人と中学生や大学生11人、加須市民ら約30人が参加した。

町民は加須市在住の小丸栄子さん(85)、関根茂子さん(69)、菊地富枝さん(51)、北本市在住の西尾トヨ子さん(75)ら。中学生らと一緒にテーブルに座り、語り合った。

小丸さんは「双葉町では田んぼ2町、畑5反、山1町を所有していたが、原発事故で所有できなくなった。津波にも遭い、首まで漬かった。あわや津波に持っていかれるところだった」と振り返った。西尾さんは「新盆で10日、子と孫を連れて(福島県いわき市)に行ってきた。離れ離れになった者が集まる

かつての避難所・旧県立騎西高校正門前で黙とうする双葉町民と参加者。11日午後2時46分、加須市騎西

参加者は大震災が起きた午後2時46分に合わせ、かつて双葉町民が避難生活を送った旧県立騎西高校(現SFAフットボールセンター)の正門前で、双葉町民の方向に黙とうした。(江利川義雄)